

第8回理事会

2011年3月8日 午後1時30分～午後5時00分

理事出席者 芥川仁 若生靖夫 鈴木忍

石丸幸一郎 唐木孝治 坂本仟弘 佐藤浩祝
志賀直人 杉山晃造

理事欠席者 斎藤美奈子 野邨幸和 古川正夫

監事出席 あがたせいじ 高橋喜代治

監事欠席 なし

組合員アドバイザー、長野良市

* 報告・検討・提案、決議事項

1、代表理事挨拶に続いて

① 2月末の段階での決算書、残高試算表を提示し、佐藤浩祝財務担当理事より、22年度会計状況の説明がある。過去からの繰り越し残金についての意見があり、処理についての提案をする。

② 鈴木専務理事より、市場開拓部会の事業報告と新年度事業計画について説明がある。新事業に対して、意見交換をする。

③ 坂本担当理事より教育部会の事業報告と予算案について説明がある。今後も、組合員のための事業展開に力を入れることを確認する。賛助会員の製品レポートなど、HPサイト、リンクページの活用方法の研究を進める。シグマレンズを使った作品展を8月開催に向けて準備を進める。

④ 石丸担当理事より、著作権部会からの活動報告があり、特に毎月第3土曜日、事務局での研究会への参加要請がある。

⑤ ebook委員会から、田中光常さんの「チータ」「キリン」について、内容修正確認によって、予定が遅れたが、4月までに公開される日程が決まった。ebook出版PRのための、企画案が提示され検討することとする。アイチューン販売の研究を進める。

⑥ 事務局より脱退者・除名者の報告がある。アンケート案について検討する。

以上の決議確認をする。

2、熊本県より長野良市組合員が、海外向けの新事業提案並びに説明があり、事業の実現にむけて、理事会が推進することを承認する。

.....

第9回理事会 議事録

2011年4月25日 午後1時30分～午後5時00分

(八丁堀区民館)

理事出席者 芥川仁 若生靖夫 鈴木忍

石丸幸一郎 唐木孝治 斎藤美奈子 坂本仟弘

佐藤浩祝 杉山晃造 古川正夫

理事欠席者 志賀直人 野邨幸和

監事出席者 あがたせいじ 高橋喜代治

監事欠席者 なし

案件

* 報告・検討・提案、決議事項

議案

1、代表理事挨拶後、各委員会の取組報告に入る。

2、各委員会の取り組み

① 佐藤財務担当理事より、22年度事業・会計報告及び23年新年度事業・予算についての説明があり、監査願いがある。

② 市場開拓部の新年度新規事業として、中国を対象とした事業計画の説明が、若生副理事長よりあり、意見交換がされる。事業内容の詳細は、検討しながら進めることとする。

③ 教育部会より、坂本担当理事から、京都セミナーの報告がある。シグマレンズ 使用の作品、レポート展8月開催にむけ、詳細を検討し募集の段取りを要請

④ 著作権部担当の古川理事より、文化庁への、変更手続き終了の報告と予算案の説明がある。

⑤ ebook委員会担当の唐木理事から、4月13日の委員会の報告がある。震災前の三陸海岸、9.11、10周年でテロをテーマに、企画提案があったと報告がある。写真家2人のebook化を進めることを確認。

⑥ オリジナルプリント委員会の担当を杉山理事と再確認し、6月3日から15日までのオリジナルプリント展の段取りの徹底を討議する。

⑦ HP委員会事務局 組合概要に組合の住所、役員名を追加。地図も必要。組合員のポートフォリオのページの見積の要請。

⑧ 組合員証のデザイン変更を23年度からすることとし、デザインの確認を各理事にメール添付で進め、有効期間を4月とする。24年度からプラスチックカード化を見据え、予算立てをする。

3、承認の件

監査終了後、事業報告、決算書、事業計画、予算案をまとめ、メール理事会とすることに決定

.....

第10回理事会 (メール理事会)

5月18日の監査を受けて、第9回総会にむけての、議案の確認と内容についての承認をとる。

第1号～2号議案 22年度分

第3号～4号議案 23年度分

6月7日付けをもって、理事全員が承認

第9回総会

6月27日(月)

午後1時半～午後5時

京橋プラザ区民館

Vol.
36

NEWS

Japan
Photographers
Union

2011.6.7 No.36
協同組合 日本写真家ユニオン

〒104-0041 東京都中央区新富1丁目4-5 東銀座ビル304
<http://pro-photo-union.jp/>

TEL 03-6280-5786 FAX 03-3553-3700
E-mail : jpu@r2.dion.ne.jp

第9回総会資料・特集号別冊

被災地からのレポート

「鎮魂の譜」

宮城県仙台市在住 佐藤浩視 理事



撮影 佐藤 浩視

3月11日午後2時46分、私は仙台市内にある自社スタジオで歩くことができないほどの揺れに見舞われた。とっさに予想されていた宮城県沖地震だと思った。長い揺れが収まると、オフィスのパソコンやモニターは全て倒れフロアに散乱していた。停電になり、電話も携帯も通じない。帰宅し、ラジオを聴いて愕然とした。想像を絶する津波の被害が続々と報道されている。宮城県沖地震とは全く異なる震源域での地震との情報もあり、暗い室内で不安な夜を過ごした。翌日、撮影機材をスタジオに取りに行き、仙台市内で最も大きい被害が出たと思われる荒浜地区に入った。朝までに200～300人の遺体が発見されたと報道された場所である。車はじきに進めなくなり、徒歩での移動となる。自分の眼が信じられない。海から遠く離れたところまで泥水で埋まっている。綺麗に晴れた青空の太陽で隅々まで照らし出された光景は悪夢を見ているとしか思えなかった。驚いたのは海岸から200～300mくらいまで進んだときだ。足元が泥から綺麗で透明な水に変わっているのである。しかも底には綺麗な砂がある。津波の水は引いているので、地盤が沈下し、海拔以下に下がった地面に、決壊した堤防から海水が流れ込んでいることを示していることに気づいたからである。あまりの惨状が信じられず、その時まで、現実として受け入れられなかった感覚が急に戻った気がした。ただ、撮らなければという、せきたてられるような思いに背中を押され、仙台港に向かった。はるか遠くくに立ち昇る巨大な黒い雲が石油コンビナートの炎上だということは、ラジオの報道から察しがついたからである。

撮影を続けていくうちに高速道路等、通行できない道路が多いことや、給油できるスタンドがないことで撮影が困難になってきたため、緊急車輛の指定を申請することにした。プロ記者の身分証明として、APA,JPS,JPUの3団体のプレスカードを提出したが、受付の担当者がコピーをとったのはJPU日本写真家ユニオンのプレスカードだけであった。これは、どの写真団体も知らない担当官がJPUが社団法人ではなく、協同組合だということで、プロとしての証明材料として、よりふさわしいと判断したのだと思われる。また、このとき、ある週間紙の取材依頼書を提出しているが、私が編集部を知っていたわけではなく、JPUの事業の一つであるレスキュー投稿コーナーを見たことで、地震の写真を投稿した私に依頼が来たらしく、今回の地震被災地の取材にあたっては、JPUの存在に大いに助けられた。おかげでその週間紙にはカラーグラビアページを始め、4号にわたって掲載していただいた。また、JPUのオリジナルプリント委員の紹介で、震災被災地を撮影した写真家による東京六本木のZEN FOTO GALLERYでの写真展に参加させていただいたところ、好評で中国北京のZEN FOTOでの写真展にも出品させていただいた。また、アメリカ、ニューヨークのマンフロットギャラリーでの写真展にも5点出品されることになった。全て商業目的ではなく、チャリティの展示で、フランスの写真記事のウェブサイト La Lettreにも16点掲載させていただいた。これが縁でTIMEとTHE INDEPENDENTの特派員の被災地取材をサポート、撮影を行った。

私自身はできるだけ多くの人に被災地の写真を見て欲しいと思って撮り続けている。広告写真をずっと撮り続けてきた人間なので、報道カメラマンとはだいぶスタンスが異なるし、絵も違うので、それが意味では評価されたのだと思う。迫力といった点では、大勢のアマチュアによる津波が押し寄せてくる刹那の動画映像には、とてもかなわない。

壊滅的に破壊された被災地は明るいうちは自衛隊、消防隊の捜索が続くが、夕刻から夜は、生者のいない沈黙が支配する空間になる。今まで体験したことのない静寂とは全く異なる音の無い世界だ。数千の命と建物が一瞬にして失われた平地に残るコンクリートの塊りは、巨大な墓碑のようだ。この信じ難い光景を留めておかなければと、ただただ鎮魂の祈りを込めて写し続けている。



撮影 佐藤 浩視

組合員写真展案内

佐藤理写真展

〔山人〕 3月5日～3月27日
中国・北京〔禅・フォト北京〕

佐藤浩視・佐藤理 参加写真展

「2011 03.11 14:46 Image of Tohoku」
4月15日～4月27日
〔禅フォトギャラリー六本木〕

唐木孝治写真展

「万華鏡で撮る！」
とってもアートな万華鏡展コラボレーション
4月20日～6月26日
〔長野県池田町、北アルプス展望美術館〕

大津茂巳写真展

「Travel at Time」5月12日～5月18日
キャノンギャラリー銀座
梅田 6月16日～6月22日
福岡 7月14日～7月26日

佐藤理写真展

〔山人〕 6月17日～6月29日
東京・六本木〔禅・フォトギャラリー〕

組合員出版案内

小松健一「石川啄木・写真スケッチ集」
ポストカード 発行 石川啄木記念館

高見 剛 写真集「天地聖彩」
A4横 120頁 4月20日発行 花乱社

編集後記

あれからもう3ヶ月が過ぎてしまったのだ。

地震、津波、そして原発事故。それに輪をかけた政治の混迷度は、復興という本来の道筋を見失ってしまったようにもみえる。想定外、未曾有の震災の言葉が、さも言いわけのように聞こえる昨今。写真家に何ができるのか。被災地に住む佐藤浩視理事は、写真家としての使命感をもって、撮影を続けている。宮嶋茂樹組合員をはじめ、報道写真に携わる写真家たちは、現地に立ちそれぞれの視点で被写体と向き合っている。ニュース報道では、瓦礫の中から見つかる家族写真の大切さを改めて感じさせてくれる。村田三二組合員他の提案などを受け、若生靖夫副理事長を中心に、写真家ユニオンとして他団体に呼びかけながら、被災者にとって、また写真撮影を職業とする同業者の立ち位置等、それぞれを考慮しながら、その活動方法を探っている。志賀直人理事は、東京、千葉など液状化の被災の様子を、我がHPの、レスキューナウに投稿し、関東での被災にもメディアが目をつける起爆剤の役目をはたした。3月11日（金）当日午後事務局内はロッカー上に立て掛けてあった書類の多くが床に落ち、事務局に入った古川正夫理事はやもなく書類の片づけを余儀なくされた。その夜は東京の交通機関は全て不通となり、結局古川理事は事務局で夜を明かすこととなり。余震で揺れる中、歩いて家路を目指す行列や、駅周辺に群がる人々にカメラを向け不安な一夜を過ごした。

復興への道のりは長い。写真家としてこの国のありようから目をそらすことはできない。

*総会資料と伴に別冊版を加えての36号となった。JPUの10周年も近い。

将来ビジョンをしっかりと描き、実りある1年にしたいものである。

（文責 唐木）